

## 研究ノート

# 近代化日本—欧米との関わりでみる日本の近代化— (7) — 世界史的視点から —

松 原 正 道<sup>\*</sup>

## はじめに

前稿では、織田信長の「徹底さ」について、將軍足利義昭に従った朝倉・浅井氏との戦いで、両家に与みした比叡山延暦寺攻略との関わりで考察した。次いで、ザビエルを受け継いだ人々として、第2代日本布教長コスメ・デ・トーレスと彼に関わる人物、特に、アルメイダについて触れた。

「桶狭間の戦い」で今川家が弱体化したため信長は武田氏と、また、將軍足利義昭との関わりで以て上杉謙信、幾内の諸将と対峙する事となるのである。

本稿では、信長の「天下布武」で関わった諸将との関係、また、中央にも進出する様になったキリスト教がそれにどう関わったかを見る事で、ザビエルを受け継いだ人々についても考察する。

## I. 織田信長を巡る人間模様

今川義元（永正16〈1519〉-永禄3〈60〉）を討ち取った後の織田信長（天文3〈1534〉-天正10〈82〉）にとって注意すべきは、甲斐の武田氏と越後の上杉氏であり、北陸の朝倉氏、近江の浅井氏だった。

清和源氏の一支族の源義光（寛徳2〈1045〉-大治2〈1127〉）が甲斐守に任じられ、子の義清（生没年不詳）が中巨摩郡武田に土着。その後、武田氏を名乗るようになり、信虎（明応3／7〈1494／8〉-天正2〈1574〉）の時、国内の諸豪族を圧倒し、甲斐一国を支配する戦国大名となるのである。

そして、信虎の子晴信（信玄 大永1〈1521〉-元亀4〈73〉）は、今川氏の所領だった駿河を領有、信濃の三国と、遠江、三河、上野、美濃、飛騨、越中それぞれの一部をその勢力圏とすると言う大々名となったのである。

---

<sup>\*</sup>淑徳大学名誉教授

味方の国は、信濃・甲州・駿河三箇国。さて遠州半・上野半合せて一国。この外三河一郡・美濃二郡・越中二郡・飛騨半国・武蔵の内少し、取り合すれば中の国一国ほどなり。

佐藤正英校訂／訳『甲陽軍鑑』ちくま学芸文庫 2018 352頁

義元の討ち死で、駿河、遠江、三河の三国を支配していた今川家が弱体化したため、那古屋、清州と尾張から東海地方に関心を深めるようになった信長と武田氏との関わりが強まる事となるのだった。



写真1 武田信玄像（甲府市）

そして、それは、信長と徳川家康（天文11〈1542〉－元和2〈1616〉）との「織田・徳川同盟」に基づく徳川軍と織田家の援軍を相手にした「三方原の戦い」（元亀3〈1572〉）で現実のものとなるのである。

だが、それ迄の信長と信玄との関係は、

信玄の四男勝頼の嫡男信勝を生んだ信長養女（龍勝院殿）が、五年後の元亀二年（一五七一）に病没すると、信長は信玄との姻戚関係を保つため、信長嫡男の信忠と、信玄の娘（信松院殿）との縁組を進めた。

中脇聖「三方原合戦と信長・家康」日本史史料研究会監修  
渡邊大門編『信長軍の合戦史』吉川弘文館 2016 78頁

と言われ、また、

今一つちゅうもくすべきことは、（中略）信玄は義昭の命を受けて、信長と本願寺顕如との和睦仲介に携わっていたことである。

本多隆茂『徳川家康と武田氏 信玄・勝頼との十五年戦争』  
吉川弘文館 2019 103頁

とも言われるのである。

そして、そこには、

信玄と顕如との関係が介在しているのである。即ち、信玄の正室は三条氏であるが、顕如の室如春尼はその実の妹であり、信玄と顕如とは義兄弟の関係にあった。また、元亀二年には朝倉義景の娘が顕如の嫡男と婚約するということに信玄と義景との関係は本願寺を媒介として生じたのである。そのため、信玄が出馬にあたってもっとも頼みにしたのは、顕如と義景であった。

同上書 104頁

と言う信玄を巡る人間関係があった。

従って、信長にとって、信玄は注意すべき存在ではあったが、良好とも言える関係にあったと言えるのである。

その一方で、28歳の信長は、東海地方の押えとして、20歳の家康との間に、「桶狭間の戦い」の後の永禄5（1562）年に同盟を結んでおり、それは、

信長が、天正十年（一五八二）に本能寺で斃れるまで二十一年間、二人の武将の間で結ばれた盟約は、ついに一度も破られる事がなかった。

白石一郎『リーダー達の戦略と決断 戦国武将伝』  
文春文庫 1996 77頁

と言われるものだった。

そして、信玄と家康とについては、

信玄と家康の関係は、永禄十一年の信玄家臣による北遠江侵入に加え、その後の家康の今川氏真に対する措置や、上杉謙信との同盟（三越同盟）によって険悪化していた。

同上書 78頁

と言うのである。

また、

元亀二年十二月に、氏政は武田信玄との再同盟締結に踏み切った。これにより信玄は、北条氏からの圧力を顧慮する必要性から解放さ

れ、上杉・徳川両氏をにらんだ作戦の立案に移るのである。

平山優『武田氏滅亡』角川選書 平成29 30頁

とも言われるのである。

上杉氏と北条氏との「越相同盟」が破棄され、新たに北条氏との間に結ばれた「甲相同盟」(元亀2〈1571〉年)によって、背後を突かれる心配がなくなった信玄は、東海地方に関心を向ける事が出来るようになったのである。

そのため、三河の豪族への調略、元亀3(1572)年の信玄自身の出馬は、今川義元の軛から解放され、父祖の地三河を固めようとしていた家康への挑戦となるのだった。

そして、それは、中央の政治情勢と連動しているのである。

事の起こりは、三好長慶が天下の権を握ったことにある。

太田牛一著 中川太古訳『現代語訳 信長公記』

新人物文庫 2014 120頁

とある様に、「事の起こり」は、信長、秀吉、家康等の天下人に先んじた存在とも言われる三好長慶(大永3〈1523〉-永禄7〈64〉)の台頭にあると言うのである。

江戸時代前期の日本人は、足利将軍を滅ぼし、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人の天下人に先んじた人物として、三好長慶を認識していたのである。そうした中央政権の変遷についての認識は、長崎の出島を通じて、十八世紀のヨーロッパにもたらされた。

天野忠幸「はじめに 世界に伝えられた三好氏」『諸人之を  
仰ぐこと北斗泰山 三好長慶』ミネルバ書房 2019 ii

と言われ、また、

近年の戦国史研究において「天下」および「天下人」の意味が変化している。すなわち神田千里氏 {神田二〇一三} や金子拓氏 {金子二〇一五} の研究により、戦国時代の「天下」が京都を中心とした畿内近国の数ヶ国のことを示していたにすぎないことが明らかにされ、「天下人」についても、豊臣秀吉のような全国を統一した人物ではなく、「京師鎮護」(『信長公記』)すなわち京都(=将軍)を守護して、政治を領導した者のことが判明している。ただ金子氏は「天下人」を信長・秀吉の二人に限定しているが、本書においてはもう少し広くとって、将軍・管領以外で「天下を宰領した人」と定義したい。



村井祐樹『武門の棟梁、天下を平定す 六角定頼』

ミネルバ書房 2019 はしがき iii - iv

とも言われるのである。

「三人の天下人に先んじた人物」としての長慶は、父元長（？－享禄〈天文1・1532〉）が管領細川晴元の策略で一向一揆に攻められ堺で敗死させられるのだったが、天文3（34）年、晴元の執事として被官。そこで、自らの才覚や兄弟達の協力で力を得ていくのである。



写真2 三好長慶像 南宗寺（堺市）

尤も、上記の指摘にもある様に、「天下を宰領した人」ではあるが、長慶の勢力は四国および畿内全域とされるのである。

長慶は、晴元および12代将軍義晴を京都から追放して、自ら入京。実権を握り、天文21（52）年には、13代将軍となった義輝を京都に迎え、管領細川氏綱に代わり権力を振うのである。

そして、天文22（53）年には、義輝を近江国朽木に追放するが、永禄1（58）年、再び義輝を京都に迎え、永禄3（60）年にはその相伴衆に列し、修理大夫となり、河内国飯盛城に居を移すのだったが、この頃から家宰の松永久秀の力が増大するのである。

「（前略）幸い十二代将軍足利義晴公の遺言もありますから少しも早く京に上り、天下の為政をめぐって意見を申すならば、末代までも三好家が安泰であり続けるであります」と諫められ、京に上り、天下を治め、京の所司代も三好家が任命し、五畿内はいうまでもなく、近国の武士を大身・小身ともに指揮下に置き、武士たちにあこがれ慕われ、十三代将軍足利義輝の妹を嫡子義継公の奥方にむかえた。

佐藤 前掲書 154頁

と、将軍家と姻戚関係となり三好家が都の政治の中枢を担うのである。

これに先立ち、

義晴は十二月十九日には三好氏による摂津の争乱を理由に近江の坂本において六角定頼を加冠役として嫡子義藤（後の義輝）を元服させると、翌日には征夷大將軍の職を譲った。

天野 前掲書 47頁

と言われる様に、細川晴元（永正11〈1514〉－永禄6〈63〉）、六角定頼（明応4〈1495〉－天文21〈1552〉）に擁立された10歳の義輝（天文5〈1536〉－永禄8〈65〉在職天文15〈1546〉－）が、天文15年、近江日吉の祠官樹下成保邸で元服。翌日、12代の父義晴（永正8〈1511〉－天文19〈50〉在職大永12〈1521〉－天文15〈46〉）の補佐を得る事で、13代將軍となるのである。

だが、將軍になったとは言うものの、同16年、細川晴元と畠山政国との争いにおいて、將軍家は畠山氏に与したため、父子共々坂本へ逃れる事になるのだった。

翌年、晴元と和し、6月には帰洛するのだが、翌18年、今度は、晴元が家臣の長慶と摂津で戦い、敗れたため、義晴・義輝父子は今度は晴元と共に坂本に移るのであるが、義晴は、翌年、39歳で病没、波乱の生涯を閉じるのである。

父の義晴は將軍に在位している間、幕府の有力者の権力争いに巻き込まれて何度も近江に（滋賀県）に逃れ、最後は京都に戻れないまま死去している。兄の義輝もまた將軍就任後、京都に入ることができないまま、五年間も近江の地で生活をしたことがある。

谷口克広『信長と將軍義昭 連携から追放、包囲網へ』

中公新書 2014 4頁

と言われる様に、將軍と言えども、その地位は決して安泰ではなかった。

応仁元年（一四六七）、守護の家督争いに端を発した応仁・文明の乱が起こる。その後は、日本各地に地方政権が蟠踞する状態がしばらく続くことになる。いわゆる戦国時代である。日本の中央に位置する幕府も、京都・畿内のみを勢力圏においた地方政権の一つにすぎなくなってしまうのである。

同上書 4頁

とも言われるのである。

義輝は、その後も、転々とした後、永禄元（57）年、定頼の子六角義賢（大永1〈1521〉

慶長3（98）の仲介で長慶と和し、京都に帰還するのである。

## Ⅱ. ヴィレラの畿内での布教

京都に戻った義輝ではあったが、実権は、長慶に握られており、その政策も、長慶の了解を得なければ公けにする事は出来なかった。その一つに、キリシタンによる宣教の許可がある。

前項でも触れた、

トレスの下に働いたヴィレラ（Vilela, Vilella 1）の活動が注目される。

大類伸『キリシタン運動の時代』—日本学士院蔵

キリシタン資料について—アルファ 1985 17頁

と、大類伸博士の指摘にある、ポルトガルのエヴォラ出身で、ベネディクト修道会で教育を受けたが、インドでイエズス会に入会。弘治2（1556）年、豊後の府内に来航、平戸、博多等で活動した後、ザビエルの後任の日本布教長トーレス Cosme de Torres（1510〈永正7〉—70〈元亀1〉）の指示で、永禄2（59）年に上洛した司祭のヴィレラ Gaspar Vilela（1526？—72）に布教の許可を与えるのである。（同3年）

かの仏僧（永源庵）は、彼のためにそのことで尽力することを引き受け、またもう一人、はなはだ名望ある貴人で、政庁の式部職についている伊勢守殿<sup>イセノカミドノ</sup>は伴天連に同じく好意を寄せており、兩人は、司祭が希望するような公方様の允許状を獲得するに至った。

フロイス 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史 1 織田信長 I 将軍義輝の最期および自由都市堺』中公文庫 2000 78頁

と言われるのだが、伊勢守とは長慶の事である。

当時の第一の権力者三好長慶の世話により、翌年初夏の候、正式に布教の許可状が下附された。

海老沢有道『高山右近』吉川弘文館 2009 8頁

とも言われるのだが、

けれども将軍は力のない将軍で、下剋上の時代ですから、この三好長慶が将軍・足利義輝にこれを出すように命じた。そして実質的に政

権を支配している三好長慶自身も布教を許可している。これが一五六〇年（永禄三）です。

神田宏大「河内キリシタンの繁栄とその広がり」神田宏大，  
大石一久，小林義孝 撰河泉地域文化研究所編  
『戦国河内キリシタンの世界』批評社 2016 25頁

と言われるのである。

そして，そこには，

弘治二年の山口の滅亡，永禄二年（一五五九）の平戸・博多における迫害により，分散していたバアデレらは，期せずして全部豊後に集合した。ここにトルレスは，バアデレ・ヴィレラ Gaspar Vilela を選び，ロレンソ・ダミアン Damian の二邦人を附し，京都開教の大任を与えた。

海老沢 前掲書 8頁

と言った西国における政治情勢に伴った，イエズス会側の事情が背景にあったのだが，こうして，同会としては，ザビエル以来，念願としていた「都」での布教を始める事が出来るようになったのである。

トールス同様，日本の文化や風俗に順応する事を旨としたヴィレラは，同行した，肥前白石出身で，琵琶法師の渡世中ザビエルから受洗した半盲の修道士のロレンソ（大永6〈1526〉－文禄1〈92〉）や，筑前秋月出身で寺の小僧から府内で受洗した同宿のダミアン（天文7〈1538〉頃－天正15〈1587〉）と共に活動。永禄4年（1561）年には，京都の坊門姥柳町に天主堂を建てるに至ったのである。

だが，こうした彼らの活動に対して，

伴天連どもが都に定住するのを見て，仏僧らの反対運動は一段と激しさを加えた。その彼らが望みを囁いたのは，熱心な法華経信徒松永久秀であった。

同上書 9頁

と言われる仏僧達の反対の背景に長慶の家臣の松永久秀（永正7〈1510〉－天正5〈77〉）がいたのである。そのため，ヴィレラ達は，同年7月，当時の自由都市・堺に移り，豪商日比屋了珪（生没年不詳）宅に身を寄せるのである。



写真3 ザビエル公園（堺市）日比屋了珪宅址

そして、六角義賢が畠山高政（生没年不詳）や根来寺の支援を得て三好長慶に戦を仕掛けるのだが、長慶の勝利に終わるのだった。それに伴って、三好家において、松永久秀（永正7〈1510〉－天正5〈77〉）の比重が重くなるのである。

一旦は都へ戻ったヴィレラだったのだが、

永禄六年（一五六三）の春、パアデレらは堺の新信者を指導のため、また堺に下ったが、その留守中、再び伴天連追放の計画が進められた。

同上書 19頁

そして、

結城山城守忠正と、公卿の清原（舟橋）大外記枝賢とを選び、伴天連と宗論させて事を決し、その上で放逐し、教会を没収しようということになった。

同上書 10-11頁

また、

一五六三年（永禄六）春、飯盛山・三好長慶が実効支配していた時、彼の部下で下剋上の代表的人物・松永久秀が京都の仏教勢力や公家たちと謀って伴天連と呼ばれていた宣教師たちを都から追放しようと画策したことに始まる。その命令を受けたのが「三好長慶の頭脳」といわれ、文武両道に秀でた結城忠正であった。彼は公家の清原外記、高山図書（友照）と共に伴天連追放の急先鋒として立ち上がった。

た。

神田他 前掲書 34頁

とも言われる如く、彼らは詰問を受ける事になるのであるが、高山図書の息子の長房（右近）は父に勝る反キリシタンで、それを父に迫ったとも言われているのである。

これに応えるためにロレンソが選ばれ、先に、結城山城守の問いに対し、信仰の絶対を吐露し、山城守を感心させたディエゴが行を共にする事になるのだが、決死の覚悟を以て奈良へ赴くのだった。



写真4 高山右近ゆかりの  
高槻カトリック教会（高槻市）

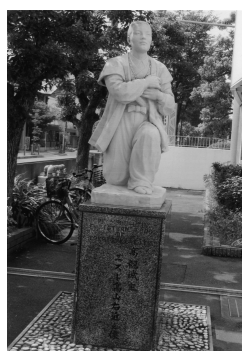


写真5 高山右近像  
高槻カトリック教会

そして、

宗論は実に数日間、休む間もなく続けられた。そのうち驚くべきことに情勢は一変し、三人はキリシタンに好意を寄せ、主君久秀にも復命。

海老沢 前掲書 13頁

と言われる展開を示すのだった。

そのため、

ヴィレラは奈良に迎えられ、結城・清原両氏仁カテキズモCatechism（教理）を授け、両氏と結城氏の嫡子、ほか数名の身分のある士分に洗礼を授けた。

同上書 14頁

と言われ、

ヴィレラは結城・清原両氏の率いる多くの家臣に守られ、凱旋將軍<sup>がいせん</sup>の如くに入洛した。今までの熱烈な反キリシタン首領が改宗したという事実は、<sup>きょうわらべ</sup>京童をはじめ漸次近隣諸国に伝えられ、キリシタンに関心を抱く人を多くさせた。

同上書 15頁

と言われるのである。

## 結

こうして、ヴィレラ達の活動により、「都」、畿内にキリスト教が広まる素地ができたのである。その後、信長の勢力伸長により、仏教集団に手痛い思いをさせられた信長の庇護の下、キリスト教は盛況を見るのであるが、そこに至るまでは、未だ、紆余曲折を経るのである。

## 参考文献

- 太田牛一・中川太古訳『現代語訳 信長公記』 新人物文庫 2014.  
 佐藤正英校訂／訳『甲陽軍艦』 ちくま学芸文庫 2018.  
 谷口克広『信長と將軍義昭 連携から追放、包囲網へ』 中公新書 2014.  
 本多隆成『徳川家康と武田氏 信玄・勝頼との十四年戦争』 吉川弘文館 2019.  
 フロイス 松田毅一・川崎桃田訳『完訳フロイス日本史1 織田信長篇1』 中公文庫 2000.  
 平山優『武田氏滅亡』 角川選書 平成29年.  
 太田浩司『浅井長政と姉川合戦—その繁栄と滅亡への軌跡』 サンライズ出版 2014.  
 本郷和人『武士の時代を読み直す 戦いの日本史』 角川選書 平成24.  
 木村重治『浅井三代記』 小谷城址保勝会 2010.  
 村井祐樹『武門の棟梁、天下を平定す 六角定頼』 ミネルバ書房 2019.  
 天野忠幸『諸人之を仰ぐこと北斗泰山 三好長慶』 ミネルバ書房 2019.  
 立花京子『信長と十字架—天下布武の真実を追う』 集英社新書 2004.  
 結城了悟『キリシタン大名』 聖母文庫 2002.  
 大類伸『キリシタン運動の時代』—日本学士院所蔵キリシタン資料について—アルファ 昭和60年.  
 海老沢有道『高山右近』 吉川弘文館 2009.  
 神田宏大・大石一久・小林義孝『戦国河内キリシタンの世界』 批評社 2016.



## Research Notes

**The Modernization of Japan:  
The Connections with Europe and America  
from the View Point of World History**

MATSUBARA, Masamichi

In this essay, I attempt to research two persons. One of them is Oda Nobunaga and the other one is Vilela, Gaspar.

In part 1, I look at the people who were in opposition to Nobunaga, Asakura Yoshikage, Azai Nagamasa and others.

In part 2, I have attempted to research into persons who had connections with Vilela concerning his activities in propagating Christianity in Kyoto and Kinai.